

創立30周年記念誌



*30*jaehriges Jubilaeum des Bestehens
des JDG.Akita

秋田日独協会

Japanisch-Deutsche Gesellschaft Akita



30周年を迎えて

会長 古村 潤二郎

昭和47年戦前戦後を通じて、ドイツの歴史、文化等に深い愛着を持たれた有志が、高田名誉会長を中心として秋田日独協会を創立して30周年を迎えました。この間会員各位の理解と熱意により日独の市民交流を深め、秋田、パッサウの姉妹都市提携の実を結ぶに至っています。日独両国は戦後二大敗戦国として、それぞれ負の過去を背負いながら、経済復興を第一にかかげ、夢中で働いた結果気が付いたら、経済大国ということになっていました。然し現在世界は資源、エネルギー、環境、社会福祉など全く新しい次元の世界観が求められています。両国民は個有の良い伝統を生かして世界の為にならぬ貢献を致し度いものです。私達はこの高い理想に向かって、市民レベルの交流により相互に勉強し、大河に至る源流の一滴の役割を果たす為精進致し度いと思います。今後とも一層のご指導ご協力を心よりお願い申し上げます。

秋田日独協会30年の歩み

- 1972年（昭和47年）
- 1 .17 秋田日独協会設立のため、高田景次・神田金一・ベッケル神父ら市民10名で発起人有志会を開催する。
 - 2 .14 秋田日独協会設立総会を開催する。（初代会長、渡辺武男秋田大学学長、代表幹事、高田景次・神田金一）
 - 11 .16 駐日ドイツ大使グレーヴェ博士閣下公式訪問、歓迎昼食会を開催する。
- 1974年（昭和49年）
- 3 .5 秋田日独協会役員及び有志懇談会で姉妹都市提携問題を協議する。
- 1975年（昭和50年）
- 5 .30 秋田日独協会3周年記念事業を行う。（駐日ドイツ大使 Dr.Wilhelm.G.Grewe 閣下を秋田に迎える）ドイツ音楽と文化講演の夕べ。（於 秋田県民会館、参加者2,000名講師 菊池栄一東京大学名誉教授。ピアノ特別演奏 竹屋茂子）
- 1976年（昭和51年）
- 1 .16 高田景次市長、喜多川明常任理事を同伴して東京の在日ドイツ大使館でグレーヴェ大使と姉妹都市提携について懇談する。
 - 2 .17 昭和51年度秋田日独協会総会を開催する。
 - 7 .11 秋田聖霊女子短期大学音楽科生・O B 一行70名、主として西ドイツに音楽親善交歓のため約20日間演奏旅行を行う。
- 1977（昭和52年）
- 3 .10 秋田日独協会創立5周年記念に「フランクフルトを訪ねて」を2,500部出版、日独関係者に配布する。
 - 3 .22 常任理事・神田金一・喜多川明両氏がドイツ政府の招へいで訪独、約2週間西ドイツ南部の姉妹都市提携候補地を視察調査する。
 - 4 .25 常任理事・神田金一・喜多川明両氏、親善都市懇談会で帰国報告をする。この報告によりパッサウ市が有力になる。
この時点で秋田・パッサウ両市が友好都市となることに対しての推薦者：在日ドイツ大使館元参事官カール・F・ツァール博士、東北大学文学部教授松山武夫氏（カロッサ研究のためパッサウ留学）
 - 8 .1 昭和52年度秋田日独協会総会を開催する。
8 秋田市文化団体連盟（寺田九空会長）一行30名が、パッサウ市で開催された「ヨーロッパ週間芸術祭」に参加する。市庁舎大ホールにて、日本の民謡、舞踊を披露する。
- 1978年（昭和53年）
- 6 .2 昭和53年度秋田日独協会総会を開催する。
 - 6 .6 「ヨーロッパ週間芸術祭」に参加、寺田九空氏を団長とする秋田市芸術文化使節団27名がパッサウ市を訪問、前年に引き続き日本の民謡、音楽、舞踊を披露する。
- 1979年（昭和54年）
- 1 .25 南ドイツ新聞（東京）特派員G .ヒールシャー氏秋田魁政経懇談会で講演する。
 - 6 .28 昭和54年度秋田日独協会総会を開催する。
 - 11 .6 日独青年指導者セミナー訪日ドイツ代表団6名（社会教育担当）が来秋、歓迎会を開催する。
- 1980年（昭和55年）
- 4 .10 昭和55年度秋田日独協会の定期総会を開催する。
- 1981年（昭和56年）
- 5 .13 昭和56年度秋田日独協会定期総会
 - 6 .21 パッサウ市より市会議員ヨゼフ・エダー、ハンス・マルティン・ブルケルト両氏秋田市を親善訪問する。
 - 10 .12 大曲市の友好都市テトナング市代表団グラッセリー市長以下15名秋田市親善訪問。
- 1982年（昭和57年）
- 5 .13 昭和57年度定期総会を開催。
 - 7 .18 聖霊女子短大音楽科一行、ヨーロッパ演奏旅行。パッサウ市をはじめドイツの各都市で演奏、好評を博す。パッサウ市では友好活動を展開する。
 - 8 .1 秋田市青少年海外派遣団訪独。
 - 10 .16 駐日大使クラウス・ブレヒ博士を迎えて秋田日独協会創立10周年記念事業を行う。名誉会員としてクラウス・ブレヒ博士（駐日大使）ゼップ・エダー氏（パッサウ市議会議員）ハンス・マルティン・ブルケルト氏（パッサウ市議会議員）が推挙される。
- 1983年（昭和58年）
- 4 .4 フライブルク日独協会の前田幸康代表が来秋、歓迎する。
 - 4 .25 昭和58年度秋田日独協会総会を開催する。
 - 6 .30 秋田市友好文化交流使節団45名（古村潤二郎団長）パッサウ市の「ヨーロッパ週間芸術祭」に参加する。プリヒタパッサウ市長が使節団に両市の関係を公的な姉妹都市にしたい旨を表明する。
- 1984年（昭和59年）
- 4 .8 秋田市とパッサウ市の姉妹都市調印式に参列する。
 - 4 .27 姉妹都市調印を記念して、パッサウ日独協会副会長マルティン・テッシュンドルフ氏ら8名の友好代表団が来秋、調印披露の市民交流会を開催する。
 - 5 .29 昭和59年度秋田日独協会総会を開催する。
 - 11 .11 姉妹都市調印に祝意を表するため、新駐日ドイツ大使 Dr.ヴァルター・ボス閣下夫妻来秋、歓迎夕食会を開催する。
- 1985年（昭和60年）
- 5 .16 姉妹都市調印1周年を記念して、パッサウ市からハンス・ヒューズル市長以下32名の友好訪問団が来秋、歓迎会を開催する。
 - 5 .18 昭和60年度秋田日独協会総会を開催する。
- 1986年（昭和61年）
- 4 .9 第14代ハンブルク桜の女王ドリス・シュレーダー嬢を迎えて歓迎交流会を開催する。
 - 5 .24 昭和61年度秋田日独協会総会を開催する。
- 1987年（昭和62年）
- 2 .14 湯沢日独協会設立総会に出席する。
 - 5 .10 昭和62年度秋田日独協会総会を開催する。
 - 9 .19 パッサウ大学学長カール・ハインツ・ポロック博士が来秋し、大学関係者および秋田市民と交流を図る。
 - 9 .22 秋田水墨協会によるパッサウ聖アンナ教会での展覧会に協力する。
- る。ドイツ人陶芸家クナッパー氏の作陶展をAKTギャラリーで開催。
- 4 .15 友好都市パッサウ市より初めての訪問客として、マルティン・テッシュンドルフ氏来秋。同氏は帰国後パッサウ日独友好会を設立、秋田市との友好活動を開始する。

- 10.4 秋田日独協会創立15周年記念式典を開催、駐日ドイツ大使ハンス・ヨアヒム・ハリヤー博士閣下が記念講演をする。
- 10.19 姉妹都市提携3周年を記念した公式訪問団に参加する。(パッサウ市で竿燈を披露)
- 1988年(昭和63年)
- 3.26 秋田大学で6年間ドイツ語講師をされたヴォルフガング・ベルクマン夫妻(特別会員)の送別会を開催する。
- 5.8 秋田市民サッカーチーム42名がパッサウ市で親善試合を行う。
- 5.30 昭和63年度秋田日独協会総会を開催する。
- 8.1 秋田室内弦楽合奏団31名がパッサウ市を訪問する。
- 9.8 「秋田 パッサウ文化交流会展」を文化会館で開催する。
- 10.1 パッサウ大学から、ドイツ文学修士S.ヴィルナウアー女史が秋田大学ドイツ語講師に着任する。
- 1989年(平成元年)
- 4.5 秋田市・パッサウ市姉妹都市提携5周年を記念して桜「関山」500本の贈呈植樹祭を行う。
- 5.27 平成元年度秋田日独協会総会を開催する。
- 7.11 パッサウ市長ハンス・ヒューズル氏を団長とする公式訪問団8名が秋田姿勢100周年記念式典参列のため来秋、歓迎会を開催する。
- 8.1 パッサウ市青少年スポーツ交流団一行16名が来秋、歓迎会を開催する。
- 1990年(平成2年)
- 5.26 平成2年度秋田日独協会総会を開催する。
- 6.19 秋田市・パッサウ市姉妹都市提携5周年を記念して寄贈した桜「関山」の記念モニュメントを送付する。
- 1991年(平成3年)
- 2.25 パッサウ新報社編集局長R.ツィーグラー氏が来秋、親善交歓する。
- 6.3 平成3年度秋田日独協会総会を開催する。
- 7.29 パッサウ市青少年スポーツ交流団一行16名が来秋、歓迎会を開催する。
- 11.19 秋田市公式訪問団に参加、パッサウ市を訪問する。
- 1992年(平成4年)
- 4.17 パッサウ市長ヴィリー・シュメラー氏を団長とするパッサウ市公式訪問団が来秋、歓迎会を開催する。
- 6.27 秋田日独協会創立20周年記念式典、記念祝賀会を開催する。
- 9.18 秋田大学ドイツ語講師S.ヴィルナウアー女史の送別会を開催する。
- 1993年(平成5年)
- 6.11 平成5年度秋田日独協会総会を開催する。
- 8.7 パッサウ市青少年スポーツ交流団が来秋、歓迎会を開催する。
- 10.15 駐日ドイツ大使館A.フォン・シュテヒョウ経済部長の講演会を開催する。
10. ミュンヘン医科大学学生M.プリングスハイムさんの研修に協力する。
- 1994年(平成6年)
- 6.17 平成6年度秋田日独協会総会を開催する。
6. 「秋田 パッサウ姉妹都市提携10周年記念訪問の旅」を催行する。
11. 秋田市・パッサウ市姉妹都市提携10周年を記念しバッジを製作する。
- 1995年(平成7年)
- 1.21 駐日ドイツ大使館Dr.シェール公使閣下講演会を開催する。
- 5.29 「地域の国際交流に貢献する郵便局づくり」窓口竣工記念式典に参加する。
- 7.1 平成7年度秋田日独協会総会を開催する。
- 10.23 秋田日独音楽交流団主催「フライブルク・ドーム合唱団秋田講演会」に後援する。
12. 会員小松勝久氏のパッサウ市インシュタットビール会社での地ビール研究に協力する。
- 1996年(平成8年)
- 6.15 平成8年度秋田日独協会総会を開催する。
- 6.21 「パッサウ市民文化祭の旅」を主催する。
- 8.2 駐日ドイツ大使Dr.ディークマン閣下による講演会を開催する。
- 1997年(平成9年)
- 3.29 「青少年音楽の家」竣工式に参加する。
- 6.27 平成9年度秋田日独協会総会を開催する。
- 8.8 パッサウ市青少年スポーツ交流団歓迎会を開催する。
- 10.26 秋田日独協会創立25周年記念式典を開催する。
- 1998年(平成10年)
- 6.26 平成10年度秋田日独協会総会を開催する。
- 7.9 駐日ドイツ大使ガーデンパーティに参加する。
- 7.17 秋田 パッサウ青少年スポーツ交流団結団式に参加する。
- 9.1 ベラルーシウィーク・シンポジウムに参加する。
- 10.20 駐日ドイツ大使館Dr.アウアー広報参事官の講演会を開催する。
- 1999年(平成11年)
- 3.25 全国日独協会連合会総会に出席する。
- 6.25 平成11年度秋田日独協会総会を開催する。
- 6.27 「秋田 パッサウ姉妹都市提携15周年記念訪問の旅」を催行する。
- 8.18 パッサウ日独協会Prof. Dr.フェリックス会長歓迎会を開催する。
- 10.22 ニーダーバイエルン芸術化連盟H.フーパー理事長歓迎交流会を開催する。
- 2000年(平成12年)
- 1.22 青少年音楽の家代表羽川武氏による講演会
- 3.16 全国日独協会連合会総会に出席する。
- 5.23 平成12年度秋田日独協会総会を開催する。
- 7.14 ハイデルベルク日独協会副会長シュナイダー氏との交流会を開催する。
- 2001年(平成13年)
- 1.20 駐日ドイツ大使Dr.ケストナー閣下による講演会を開催する。
- 3.15 全国日独協会連合会総会に出席する。
- 6.30 平成13年度秋田日独協会総会を開催する。
- 8.25 「ワールドゲームズ2001年秋田大会」デュイスブルク市代表団歓迎会を開催する。
- 12.1 「ドイツ料理とワインの夕べ」を開催する
- 2002年(平成14年)
- 2.2 聖霊女子短期大学A.デーケン教授の講演会を開催する。
- 3.1 全国日独協会連合会総会に出席する。
- 6.29 平成14年度秋田日独協会総会を開催する。
- 8.9 「パッサウ青少年スポーツ交流団」歓迎交流会を開催する。

Die Prinzen (ディ・プリンツェン)

石 黒 こずえ

夜、録音しておいたラジオドイツ語講座を聴く。テキストにはところどころ書き込みがしてある。おお、なんと勉強熱心な！ いや、違う。何をメモしているのかといえば、歌手名 曲名 その曲に対する自分の感想。そう、番組の途中で「……ひと息入れて歌を一曲……」となるので、それをきっちり書き留めておくのだ。大切なのは 感想だ。自分の好みで「最高！・まあまあ・いまいち・興味なし」の4つにレベル分けする。ここで「最高！」とランク付けされた曲を求め、後日 CD 店へと買いに走る。最近ではインターネットでも注文するようになった。こうして手に入れたドイツポップスの中で今一番気に入っているのが「Die Prinzen=ディ・プリンツェン」(「王子様たち」の意味)だ。男性5人からなるポップスグループで、今ドイツの若者の間では絶大な人気を誇る。ただのアイドルなどと侮ってはいけぬ。メンバー5人のうち4人が、かの有名なライプツィヒ・トーマス教会合唱団出身だというから実力はお墨付き。アカペラで歌う5人の美しいハーモニーが、いいんだ、これが！

昨年夏、パッサウからスポーツ交流団13名が来秋した。我が家に2週間ホームステイしたのは14歳の男の子だ。何を話せばいいのやら、どう接していいのかわからなくて、さあ困った。例のCDをかけてみた。するとどうだ。「あっ、プリンツェンだ！ぼくも持ってるよ！」その後の会話ははずむはずむ。そして「あまり人前では歌わないほうがいい歌も何曲かあるからね」という貴重なアドバイスをくれた。ようするに、なんというか、こう、明るく口ずさむにはちょっと難のある内容の歌詞がままある、ということらしい。

その少し前の昨年初夏、サッカーワールドカップでドイツチームが活躍し、ゴールキーパーのオリバー・カーンが MVP を獲った。そのカーン選手の応援ソングが話題になったが、その曲を作り歌ったのがこのプリンツェンなのである。彼らはこの曲を日本語でも歌っており、着々と日本人ファンを増やしつつある。訪日する日も近いかもしれない。以前からのファンとしては彼らの生コーラスを聞ける日が待ち遠しい。いや、それよりも私がドイツへと飛んでいくべきなのではあるまいか。コンサート会場で現地のドイツ人ファンに混じってこぶしを振り上げ、日々通勤の車中で聞いている曲と一緒に歌う、というのが今の私のささやかな、いや、でっかいでっかい夢なのだ。

憧れのドイツ

川 又 祐

後にも先にも私がただ1度訪れた外国はドイツ（とオーストリー）である。88年7月から10月までの2カ月半の滞在であった。それは資料収集と語学講習を目的としていた。今やおよそ15年が過ぎ去ったというのに、思い出が尽きることなく甦ってくる。見聞するものすべてが新鮮で、かの地で知り合った人たち、講習の内容、滞在先での生活、ウィーン小旅行といったものが今でも忘れられない。そもそもドイツ語とのつき合いは大学時代の語学選択に始まり、卒業後も現在に至るまでそのつき合いは続いている。ドイツ語選択の理由には音楽があった。ドイツ語を学べば音楽との距離が縮まる気がしたのである。もしドイツ語を選択していなかったらここ秋田の地で日独協会に入ることもなかったであろうと思うと、因果の妙というしかない。

ドイツに対する憧れは今なお強い。もし外国へ行けるとしたらどこがいいかと尋ねられれば、もちろんドイツ（私がドイツという時、それはオーストリーをも含むドイツ語圏を意味している）と答えるであろう。なぜか、ドイツでは中世以来の伝統を重んじ、街並みにも風情があり、ゆったりとした時の流れがある。そして何よりもそこには音楽と文化が息づいている。浸りたい雰囲気にあふれているのである。私の密かな夢は、ドイツリート、オペラ、オペラッタなどの歌詞を暗記して生の音楽を解説書抜きで楽しむことである。しかしその実現には程遠く、手元には学習用のCDが何枚もあるにもかかわらず、彼らは私の声がかかるのをひたすら待ちつづけるという悲惨な状況に置かれている。彼らの出番が来る時、それはドイツへ行くことが決まった時であろう。憧れは、ここ秋田からああでもないこうでもないで夢に耽ることによって、さらに増幅される。その夢こそ私にとって幸福な時間にほかならない。

「ドイツに対する思い」

喜多川 明

忘れもしません。昭和47年、当時大町にあった秋田魁新報社の講堂で、高田景次氏の主唱により秋田日独協会が僅か十数人で発足しました。

たとえ小さな会であっても「ドイツに関心ある有志の会」としたいということで設立されたのですが、今や100人を超える会員を有し、30周年を迎え、ほんとうに感無量です。

いろいろ思い出はありますが、創立3周年に秋田県民会館で行った「ドイツ音楽と文化講演の夕べ」には竹屋茂子さんの熱演もあって定員を上回る2,300人の聴衆を集め、ご臨席の駐日ドイツ大使、ヴィルヘルム・グレーヴェ博士は、これほど多くの秋田市民がドイツに深い関心があることに驚嘆しておられました。

交渉を開始して年月はかかりましたが、昭和58年、パサオ市と姉妹都市締結が実現し、さらに交流は深まりました。平成元年には高田市長、淡路市会議長の公式訪問団が桜の苗（関山）500本の贈呈をパサオ市で行いました。そして平成4年には答礼として「友情の鐘」が公式訪問団長、シュメラ市市長から秋田市に贈られました。

それ以後も交流は着実に深まり今日に至っていることは、まことに喜ばしいことです。この交流を支えてくれたのは、グレーヴェ大使をはじめとする歴代の大使や、設立にも貢献してくれたツァール一等書記官や大使館の人たち、歴代の協会長や市長さんたちのご努力と信じています。初代の神田事務局長と現在十年以上にわたり局長を務めてくださっている澁谷さんとそれを補佐している菅沼さんには特段の敬意を表しております。

私は協会のおかげで日独の多くの人びとと心の触れ合いを持つことができ、ほんとうに幸せと思っております。

ドイツへの親しみ

九 嶋 勝 司

ゲルマンから来た germany では特別の感懐も湧かないが、ドイツと言われると、
“ どいつ（何奴）もこいつ（此奴）も ”
という気持とはならず、逆に仲間意識や親しみが起こるから不思議だ。
ドノー河とダニューブ河とは同じ河だとは知らない小学生の頃、“ダニューブ河の漣（細波 = さざなみ）” という曲を聞かされたが、その時はドイツの河だと思っていた。
1959年の秋、学会でオーストリア・ウィーンに行ったとき、そのダニューブ河を目の辺りにしたくて、お粗末な電車で上流の駅まで行き、更にタクシーで、山峡（山間 = やまあい）を流れるダニューブ沿いに走り、車を乗り棄ててからは歩いて見たことがあった。河岸に迫（せま）る小高い峯々の所々に、その昔侵攻するローマ軍に備えて築かれた古い砦が残っていた。その峰から吹き下ろす秋風が、河の面に、やや大型の漣を漂（ただよ）わしていた。“ああこれがダニューブ河の漣か” としばし感懐に耽（ふ）けたのだった。そのとき、“これぞ独逸らしい風景だ” と思ったが、頭の片隅を“風蕭々として易水（えきすい）寒し” と荊軻が詠じた“易水の歌” が過（よぎ）ったのだった。ところが、友好姉妹都市締結のため高田市長にお供し、オーストリア国境にあるパッサウを訪れ、ドノー河畔に宿をとった。ドノーは此処で、怒りの河に異名があるイン河と合流し、悠々と流れているが、漣の面影など何処にも認められなかった。ただ、河水は、ささ濁りしており、それでドイツ語の dunkel を思い起こさせた。ドイツ人は、この dunkel を好むようであるが、これは些か趣きを異するが、日本の“詫（わ）び、寂（さ）び”に通ずるのではあるまいか。
友好記念に、日本から送った八重桜をドノーの岸辺にも植えて貰った筈だが、“朝白に匂う山桜花” がドノーの水に大和心を映（うつ）していることだろうか。
中国はチャンコロ、ロシアは露助、アメリカはヤンキー（洋鬼）、韓国にはチョウセンと言う、親しさの反語があるのに、独逸にはないのが、不思議なことだ。

愛と感動の日々

秋田市榎山登町

齋藤 育



みんな泣いています。大人も子どもも。ドイツ人も、日本人も。

感動的な別れの場面を映画などで観ることはあっても、自分が外国の駅で体験しようとは思っていませんでした。

別れがこれほど美しく、切ないものであることを初めて知りました。あっという間のパッサウの4日間でした。

ドイツ統一の記念すべき10月3日午後、不安と緊張の中でバスを降りた私達に「コンニチハ」と温かい手をさしのべ、心から歓迎してくれたパッサウ市の人々に、あらたまって「ゲーテン・ターク」などと形式的なあいさつは必要ありませんでした。

3泊4日という短期間でしたが、お天気にも恵まれ、見るもの聞くものがすべて新鮮でした。お客さん扱いをせず、心から家族の一員としてもてなしてくれたことに深い感動を覚えたのは私一人ではなかったと思います。

最近「国際化」とか「国際人」などという言葉をよく耳にします。今回の訪問で、外国に旅行することが、また、外国語を話せることだけが、国際化された人間でないことがよくわかりました。

いろいろな会合に出席してみて、ドイツの子ども達は小さいときから、社会のルールを守るしつけが身についているなど、学ぶべき点も多く、日本人として反省させられることも多々ありました。

パッサウの人々とは、新しくできる旭北小学校での再会を約束しました。

これは、平成3年10月、私が勤務する秋田市の旭北小学校の子どもたち（親子11組を含む31人）が、姉妹校であるドイツのパッサウ市ノイシュテフト小学校を親善訪問したときの訪問記です。

子ども達にとっても一生の思い出となる貴重な感動の旅でした。



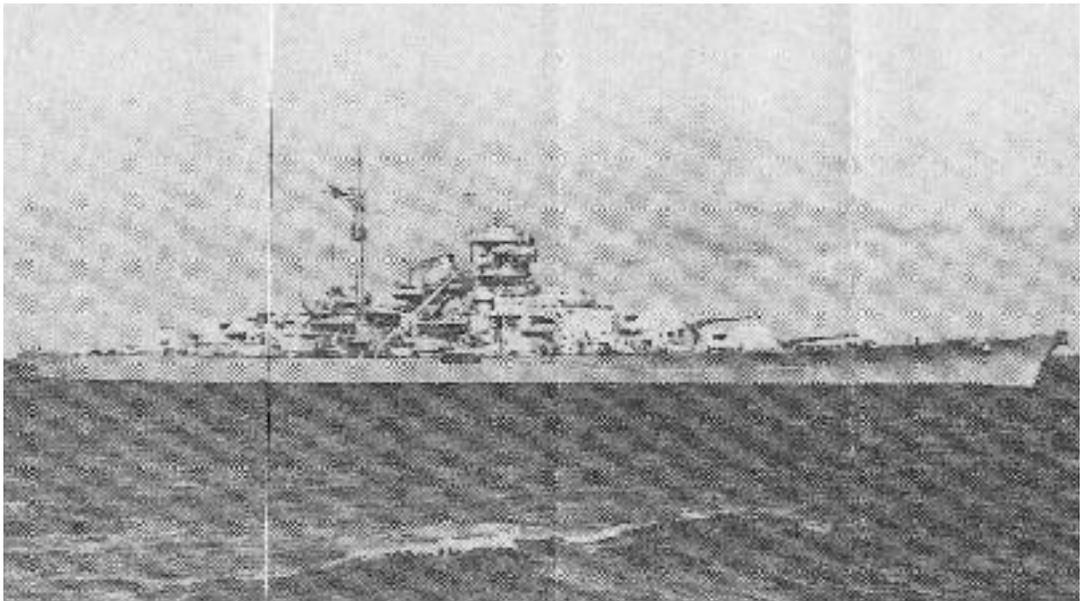
戦艦ビスマルク

秋田市土崎港中央三丁目10番17号

佐川光男

私の心の中に、ドイツという国が特別に意識されるようになったのは、昭和16年5月に発生した戦艦ビスマルクの海戦記が契機になっています。ビスマルクは昭和15年8月に完工した当時世界最大クラス41,700トンの戦艦で、ドイツの造船技術の粋を尽くして建造され、攻守にバランスのとれた性能を備えた傑作戦艦として注目されていました。主砲は38センチ砲8門で、正確無比な工学測距装置にサポートされた、すばらしい攻撃力は、外国海軍にとっては一大脅威でした。昭和16年5月中頃バルト海のグダニスク湾から、重巡洋艦プリンツ・オイゲン12,500トンを伴って大西洋の通商破壊作戦に出動しました。イギリス海軍の厳重な警戒網をすりぬけてノルウェー海から大西洋へ出たところで、イギリス巡洋艦に発見され5月24日早暁迎撃に向かったイギリス戦艦フッド42,000トン38センチ砲8門及び新造艦プリンス オブ ウェールズ35,000トン36センチ砲10門と交戦し、ほんの数分間でフッドを撃沈し、プリンス オブ ウェールズに大損傷を与えました。巨漢フッドは命中弾を3発打ち込まれて3分間で轟沈したそうです。この戦闘後プリンツ・オイゲンと別れて単独で大西洋を西に向かったビスマルクは、空母ビクトリアスの艦載機の攻撃を受け舵とスクリューが損傷しました。艦の速度は半減し、操舵もままならず作戦継続は無理な状況に陥りました。それで応急修理のため、フランスのブルターニュ半島西端にある軍港ブレストに帰投を急ぎました。しかしイギリス海軍の執拗な追

戦艦「ビスマルク」級 BISMARCK CLASS



ビスマルク Bismarck 第1次世界大戦後ドイツ海軍が建造した最後の主力艦がビスマルク級2隻である。ベルサイユ条約廃棄後の1935年6月に終結された独英海軍協定にもついて計画され、公表された基準排水量は35,000トンだったが、実際は41,700トンとなり、1940年8月、当時の世界最大の戦艦として完成した。攻防にバランスのとれた性能を備え、一足先に完成したシャルンホルスト級や重巡アドミラル・ヒッパー級によく似た、いかにもドイツ的な重厚なシルエットを持っていた。本艦は完成時、司令塔上に7メートル、前檣楼頂部に10メートルの測距儀を備えていたが、写真ではそれが見えないので、引渡しに先立つ海上公試中の状況と思われる。

跡を逃れることは出来ず空母アークロイヤル、戦艦ロドネー、キングジョージ5世等のイギリス主力艦隊に包囲され袋叩きの猛攻に曝されたのです。ビスマルクは弾薬のある限り最後まで奮戦しました。無線でヒットラーに航空機の援護を要請したのですが、ドイツ空軍は海上の戦闘には不得意なのか救援機は飛ばなかったようです。見るも無残に被爆破壊され5月27日午後ブレストの西300海里の大西洋に雄姿を没したのです。戦艦対戦艦が洋上で主砲攻撃によって対決した海戦は、歴史上このビスマルクの海戦が最後で、この後は雷撃機、急降下爆撃機等を中心とする空母機動部隊が海上勢力の主体になっていきます。所謂巨砲巨艦の時代は終焉したのです。プリンス オブ ウェールズは東洋艦隊に転属しますが、戦艦レパルスとともに日本の陸上攻撃機の雷撃によってマレー沖で撃沈されたことは皆様が知っているとうりです。第二次世界大戦は昭和14年9月ドイツ軍の機甲化師団と急降下爆撃機が緊密に行動する電撃作戦 DER BLITZKRIEG によるポーランド侵攻を以て口火が切られました。電撃作戦はその後の陸上戦のスタイルを一変させた画期的戦術で、ニュース映画でその革命的な戦闘戦果の報道を見て驚愕したものです。私はドイツを画期的優秀な陸軍強国と信じこみました。そんな想いを持っていたところにビスマルクの海戦記が報道され、海軍力も最新技術によって整備充実されている事を知ったのです。というようなことから、ドイツが科学技術の先進国として特別に印象づけられたのです。この時私は小学4年生でしたが、以来ドイツは私にとって特に関心の深い国となったのです。中学、高校、大学に進学するにつれて [ドイツ的なもの] についての関心の領域が、広がってきたのですが、少年の時に受けた戦時体験の印象が通奏低音のように心の中で鳴りひびいています。

佐藤真弓



2002年12月21日、チューリッヒからスイス航空でニュルンベルクに到着。初めての冬のドイツ。さあトランクを.....が一つ足りない。取りあえずTシャツや歯ブラシ等の入ったバッグを渡され、家々のクリスマスの飾りを眺めながらホテルへ。荷を解くのも待ちきれずすぐに城壁の中の旧市街に入り、職人広場を通り、聖ローレンツ教会、そしてフラウエン教会.....あった!! 夢に見たクリスマス市がグリュウワインの匂いと共に目の前に明るく広がり、大勢の人々の楽しそうな声で賑わっていた。次の日、小ベニスと称される世界遺産の

街バンベルクへ。REで4人往復分28Euroという旅行者の為の安い運賃だった。綺麗な街並みを歩き、4つの尖塔を持つ大聖堂でミサに参加。クリスマスイヴは、ニュルンベルグで夜のミサにあずかり、感動的な神父様のお話(もちろん所々の理解)を聞いた。街中がひっそり静まり返っている。神聖な夜なのだ。ドレスデンへ移動。ホテルからエルベ川もブリュールのテラスも見えた。観光バスに乗り、新旧市街をぐるっと一回りした。どちらを向いてもただうっとりの美しい街。ツヴィンガー宮殿等をゆっくり見学。それにしても洪水の被害の跡があちこちに残っていて、ほとんどの教会や美術館に水害の様子が掲示されていた。復興したばかりのゼンパーオペラでワーグナーを、聖十字架教会でメサイアを、フラウエン教会ではオルガンを聴いた。高い天から降ってくるような心地よい音の響き。これこそ至福の時。肌色や言語ばかりではない、やはり何もかも日本と違うのだと改めて強く感じさせられる。こんな美しい音に囲まれて生活したら、誰でもいい音楽ができるようになるのではないだろうか。旅の最後はプラハ。ニューアイヴはドレスアップしてドイツ語の「こうもり」を観た。12時きっかりに客席にシャンペンが配られ、歌手もオケも一緒に乾杯!私はどうしてこんなにもドイツに惹かれるのだろうか?

“ 1971年 9月28日 JAL401便…… ”

渋谷 義博



JAL401 便は、羽田空港を飛び立ち、ジェット・ストリームに乗った。

アンカレジでトランジットし、北極点を通過後、一路ヨーロッパへ！

初めてのドイツ連邦共和国との交流は、当時西ドイツのフランクフルト空港に降り立ち、時差ボケに見まわれることもなく、空港内のカウンターでケルシュ・ビール (Koelsch Bier) を注文し、ダンケ・シェーンと第一声を発したときに始まった。

SIEMENS AG. というドイツの電気メーカーに就職し、半年間の試用期間後、本社で数値制御の研修を受けるため渡独した私は、バイエルン州の州都であるミュンヘンから南へ約80km に位置するプリーン・アーム・キームゼー (Prien am Chiemsee) に落ち着き、ゲーテ・インシュティテュート (Goethe Institut) に入学、朝から晩までドイツ語漬けになった。

友人からドイツ語の短期上達を望むなら、早くガールフレンドをつくるよう言われ、毎日のように街の教会の側に在るディスコに通ったことは、今でも良く覚えている……投資した割に成果は挙がらなかったが！

プリーンは南ドイツ随一の保養地でもある。

ドイツ最大の湖であるキームゼー (Chiemsee) の中のヘレン島には、ルードヴィヒ 世 (Ludwig) が建造したヘレン・キームゼー城 (Schloss Herren Chiemsee) が在り、今でもそこに立つと、寵愛を受けたワーグナー (Richard Wagner) の音楽が聞こえてきそうな気がする。

アウトバーン (Autobahn) を降り、州道 (Landesstrasse) に位置する街のゲーテには、世界各国から青雲の志を抱いた若者達が集まっていた……

あれから30有余年の時が過ぎた今、その生涯のほとんどを旅と異教で過ごした漂泊の作家ヘルマン・ヘッセ (Hermann Hesse) が追い求めたように、自らの心の原風景をたどる旅を始めたいと思う。



Goethe hat gesagt; Stein auf Stein mit Vorbedacht wird's am End doch ein Gebauede!

ゲーテ曰く；あらかじめよく考え、石を一つ一つ積み重ねれば、やがては立派な建物になる！

注記；2000年1月、Dr. U. ケストナー駐日ドイツ大使閣下ご講演に際し引用された言葉

JAL401 便での初心を忘れることなく、石を積み重ね続けながら……！

私の中での最近のドイツ

菅 沼 隆

朝、職場のパソコンを立ち上げるとメールのチェックもしてくれる。前の職場の名残から今でもパッサウのニュースやドイツの天気予報・話題が配信されてくる。しかし、今の職場ではほとんど目を通すことなく削除している。見たとしてもタイトルに目を通す程度で本文を読むことはほとんどない。ゆっくり読むゆとりがない。

これが最近の私とドイツとの関係を如実に物語っていると思う。そう、なんとなく日常生活から遠い存在になっており、顔を出すこともなくなっている。だから、突然顔を出されると正直戸惑ってしまう。以前はなんともなかったように思うのだが.....。

それでも突然、ドイツの心象が現われることもある。そんな時は、ドイツを起点に、周りの国々、EU加盟の国々と思いは駆け巡り、いずれはまた、映画を2本は見せられようとも彼の地を訪ねたいという気になれる。

『いずれは』ネ

私のドイツ語との関わり歴？

市立秋田総合病院

添野 武彦



秘書 鎌田嬢退社の日

私が生のドイツ語を耳にしたのは、中学2年生の時である。サウンド・オブ・ミュージックで有名になった、オーストリアのトラップ家のアメリカへの亡命までを描いたドイツ映画《菩提樹》を見た時であった。主演女優のロミー・シュナイダーの美しさも然る事ながら、バックに歌われた【冬の旅・第5曲；菩提樹】の美しいハーモニー、未だ見ぬ国の風景の美しさが深く印象に残った。また分らない乍らも、言葉の意外に音楽的なリズム、耳への心地よい響きも音楽と相俟って心に刻まれた。そして、いつかはドイツ語を話せるようになりたいものとも思った。大学生になり、第2外国語はドイツ語であった。初歩の文法と発音を学ん

だが、幸い私は歌が好きであったので、語彙とかは歌詞の方から増やすことができた。また、面倒と言われる間接話法も、《夜汽車》とか《小鳥ならば》と訳されている《Wenn ich ein Vögelein wäre》を覚えていたことで難なくパスした。「も煽てれば木に登る」というようなもので、一層、ドイツ語に力を注ぐこととなった。また、ドイツ人教師によるドイツ語会話の授業があったが、先輩がこの先生を指導者に据えて、ドイツ語会話クラブを作っていたので、それにも参加。5年先輩の驚くほど流暢な話振りに、少しは近づこうと、隆車に向かう蟻螂の如きまね事を少ししてみた。あまりに進歩はなかった（本質的に怠惰なことに起因している）。しかし、少し判ってくると、専門語の中には英語の辞典でドイツ語を調べたり、ラテン語の語尾と判るものは、そちらから調べたりすることも出来ることが解ってきた。言葉の面白さであろう。むこうの文献を時々音読したり、時々NHKのドイツ語会話を聞いたりしながら、ドイツ語との接点を細々と保っている昨今である。いずれは秋田とパッサウ市の医療交流を夢見ながら。

ささやかな遍歴

高 堂 裕



ミュンヘンのポーラナー醸造所酒場での「文学を離れた私」と妻と独逸の友人たち。

ギョエテとは俺のことだと言った筆者の、古い凸版の本を父の書架から引っ張り出したのが、独逸との最初の出会。訳者著すところの膨大な書物の海に時々遊びながらも、疾風怒濤の間に拍ち過ぎ、ヘルダーリンとノヴァーリスに、これも日本語で感銘し、ニーチェとフロイトという何やら巨大な塔を横目に、ホフマンシュタール、ツヴァイク、リルケ（ブラハ繋がりでカフカ！）とウィーンに浮気し、ここでフランス病を発症、ブルーストが興味の大半を占めて仕舞う、トここまでが高校時代。ブルーストとフランス小ロマン派。付

合いでのカイエ派には語学的に歯が立たず、民俗学と民族学への目を開いて（ここでグリム兄弟に再会！）貰うに止まりましたが、フーコーとカイヨワがお気に入りの大学時代にビックリしたのがロベルト・ムジール。そしていま旬は矢張りギュンター・グラスでしょう。（内緒ですが、今以て離されないのはトニオクレーゲルです。）

話は一転、ビール事業に無謀な参入を決心、仕事で訪れる独逸で必ず行くのはパブと「独逸博物館」。面白い！です。美術館や音楽会へも時々行くのは、ドイツゴがダメな負目。（前段の「華麗な遍歴」は美しい日本語によるソレ。）その弱みゆえに「文学」から離れる私……トというわけで、ここからはビールのお話。独逸やチェコ、ベルギーを旅して思うのは、ビール世界は何と豊穡であるか、トということ。ビールという名の文化は、他の全てがそうであるように、過去を今と未来に生かすことにほかなりません。大きなビールの文化は間違いなく残るでしょう。でも、独逸に限らず、世界中から消えようとしている「小さな文化」。大きなうねりの中に忘れられたように展示される、過去の小さな光芒。でもあの独逸博物館では、その多くは機能します。そのように、それら小さなものを少しでも守ることが出来れば本望です。それを気づかせてくれた「ビール」に感謝！

高橋 昌 一



1990年7月27日（金）午後、秋田市青少年スポーツ交流団は、夏のエネルギーな太陽が燦然と輝き、ぬけるような青空が美しいドイツ連邦・バイエルン州ドナウ・イン・イルツの三河川の合流点に地域する古都パッサウ市に到着した。

大いなる可能性に満ちた15名の青少年達が、15000 粒米彼方のヨーロッパの青少年達とスポーツ交流をとおして友情を育み、ドイツの生活、習慣、文化を肌で感じ、そして歴史を学び、ドイツ民族の叡智に触れてきました。シュメーラ・パッサウ市長は氏の歓迎のご挨拶の中で「青少年達は両市の未来の友好の使者であり、我々大人達は無限の可能性を秘めた彼らが相互に交流した友情を結べるよう尽力すべきである」との考えを述べられました。

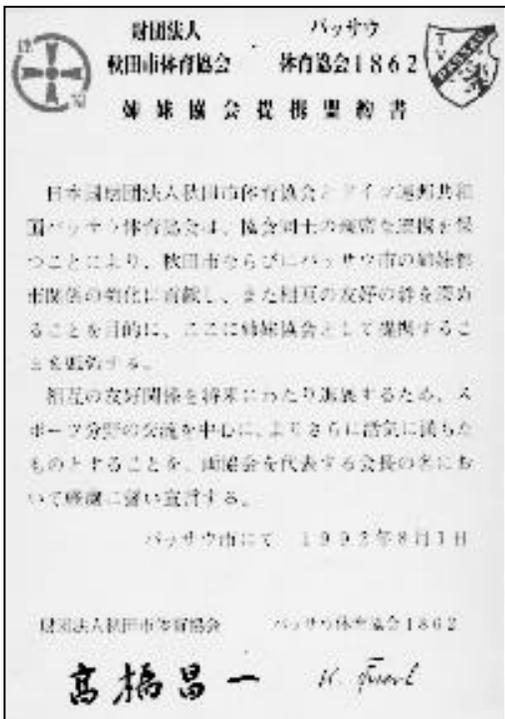
私自身も「このたびの交流団の団長として国際交流の一翼を担い、世界が平和のもとで繁栄するためには、人と人の結びつき、そして信頼が最も重要であることに思いを強くし、なお一層秋田 パッサウ両市の友好を盤石なものにするために、微力ながら尽力してまいる所存である」こと強調しました。

7月25日11時50分ルフフトハンザ航空713便に搭乗直後に

「遅しき 若きら連れて パッサウに

今発ちゆかん 成田空港」と出発の感慨を詠みました。

更に、2年後の1992年8月に再びパッサウを訪れました。今回は、パッサウ市1862体育協会との間に姉妹提携盟約書の調印が行われたわけではありますが、このようなスポーツ面における国際提携は、県内においては、もちろんこれをもって嚆矢とするものであり、また全国的にみても極めて稀なことであるとされており。



私は「このたびの調印を契機として両協会が一層の努力を重ね、両市・両国の友好関係の発展の一翼を担ってまいりたいと念願し、明年の夏ご来秋の際には、貴市からご寄贈いただきました『友情の鐘』が高らかに鳴り響き、皆様を歓迎申し上げることでありましょう」とご挨拶申し上げました。

「歴史あるヤーン競技場の炎天下 両市の若人らスポーツに汗す」

「正庁に両市の人ら集い合い 厳肅に姉妹提携の調印す」

将来にわたり両市の青少年達の間で、未来に向って幾多の友情が芽生え、数多くの花が咲きますことを念じ「思い出」といたします。

アジアとの出会い 私の異文化体験から

聖霊女子短期大学教授

アンネリーゼ・デーケン

(シスター・アグネーゼ)



Al fons Deeken, Anne Liese Deeken Tokio

日独協会創立30周年おめでとうございます。

私は北ドイツのブレーメンの近くで生まれ、8人兄妹の7番目として生まれました。両親とも敬謙なカトリック教徒で、生まれてすぐ洗礼を受けました。20歳の時、修道女になる決心を固め、24歳の時、東洋に強く惹かれました。私の他に家族に国際協力活動をしている人がもう2人いて、上から3番目の兄は今、上智大学で、「死の哲学」などを教える傍ら、「死への準備教育」の普及に奔走しています。そして、姉はインドネシアのシモーという島で働いています。ですから、小さいときから国際協力について興味がありました。家庭の中にそういう雰囲気があったと思います。

戦争が終わった1945年の秋頃から、私の故郷の町には東欧圏からの難民が続々と入ってきました。市長の要請で、各戸に難民の宿泊が義務づけられ、私の家には1組の夫婦と中年の独身女性の3人が割り当てられました。趣味も環境も全く違う人たちと8年間共同生活を共にする中で、父母は私たち7人兄妹に「同じ人間同士として、飢えている

時にはパンを分け与え、旅人には喜んで宿を貸そう」と諭し、いつも変わらぬ温かい態度で彼らに接しました。これは「自分を愛するように隣人を愛せ」と言うキリスト教精神の自然な発露であり、子供たちの心に他者への思いやりを育てる得がたい家庭教育の機会ともなりました。

そして、私が初めて日本に来たのは39年前。秋田に来たのは34年前になります。39年間、異文化の中で暮らし続け、ものの見方が幅広くなると同時に異文化との出会いが、自己を見つめ直すきっかけとなり私を非常に豊かにしてくれました。

1973年から1983年までの10年間、高田景次会長、喜多川明さん、神田金一事務局長、ヨハン・ベッカ神父の翻訳と、集まりの時の通訳を度々お願いされたことを思い出しています。その時代は、高田景次会長、喜多川明さん、ヨハン・ベッカ神父の熱心な活動が思い出されます。特にヨハン・ベッカ神父はドイツのふるさとの多くの家族に頼んで秋田の方々のために、ホームステイの機会を与えてくださいました。

1983年からは、事務局も充実したものになり、渋谷義博さんが、素晴らしい翻訳と通訳をくださったので大変助かり、嬉しく思いました。

日独協会を通して、日本とドイツの人々の関係と理解が、より深いものとなるように願っています。

また今後、聖霊女子短期大学でのフィリピン文化研修やアメリカ語学研修、音楽科の演奏旅行を通じて学生たちにも異文化に触れる良いチャンスになるように協力していき、若い人たちの国際交流が、今後の日本人の国際感覚の成熟に貢献する日を期待したいです。

Mehr Licht Lesebuch

戸澤 一馬

表題の「メアリヒト読本」は私が大学の医学進学課程に入学し、第二外国語としてはじめて学んだドイツ語の教材の一つであった。大学書林発行の僅か70頁の小冊子には、著者の高橋健二先生がまえがきに述べている様に知識や教養の高い学習者も興味を持って心の糧を得ながら語学の習得が出来るという趣旨が貫かれており、警句、諺、詩、文学作品のほか、実用的なことも含まれていた。まさにドイツ的な精神と情操と心のリズムに触れながら学ぶというものである。

当時は明治初頭から連綿と続くドイツ医学の影響が、まだ日本の医学に色濃く残り、医学はドイツ語というのが大方の感覚であった。

この教材の冒頭にあるドイツ語のアルファベットは、今はほとんど目にもすることもない活字体と筆記体の所謂ドイツ文字にラテン文字が添えて記載され、三部から成る本文の方は凡そ半分がドイツ文字の活字体であった。第一部には“Mehr Licht!”など Goethe、Herder、Beethoven、Hermann Hesse、Descartes、Kant、Albert Schweitzer、W.Flex ら著名人の言葉や諺が並び、第二部と第三部は有名な詩や文学作品等から成っていた。

その頃、10畳の借間で私と同室していた同級生のT君が4月の連休に帰省して、自宅から中古のラジオを持参し早速NHKの早朝のラジオ講座、初級ドイツ語、初級フランス語を学び始めたのである。イアホンなどあろう筈もない当時のこと、私も苦手な早起きをし、眠い眼をこすりながら聴講にお付き合いをすることになった。講師は夫々桜井和市先生、前田陽一先生だったように記憶する。今でも“聴講者の皆さん、お早うございます。今日は 月 日 曜日です。”のドイツ語、フランス語の挨拶から始まる両先生の講座が、50年近い歳月を経て尚、耳に残っている。気が緩みがちな日常に刺激が与えられ、ライバル意識も掻き立てられてドイツ語の学習に熱が入るようになったのも事実である。

“Mehr Licht!” 1832年3月22日、GoetheはWeimarの自宅で82才7ヶ月の生涯を閉じる直前こう云ったと伝えられ、さまざまな解釈がなされている。しかし小塩節氏は哲学的な意味はなく、眼が悪くなっていたGoetheが、単に部屋のブラインドを開けて光を入れて欲しいと周囲の人に頼んだと考えるのが自然だと述べている。私が1987年国際学会の折、Weimarを訪れゲーテハウスの臨終の部屋に置かれたベットを見た時、このメアリヒト読本の挿絵がすぐ思い出されたのであった。またこの時、案内のS嬢が私の探していた詩“Wandrer's Nachtlied”を売店で見付けてくれたことも思い出深い。

秋田日独協会に入会させていただいて20数年、会員としての活動や協力は皆無に等しいが、今でも強く持ち続けているドイツへの関心と思いの原点はメアリヒト読本の頃にあると考えている。さらに、大学2年の時のテキストDie Schicksale Doktor Burgersの著者Hans Carossaの縁の地が秋田市と姉妹都市の関係にあるPassauである。

ドイツとの思い出

西 成 辰 雄

1938年私は国際農業医学会が西ドイツ南部バーデンヴェルテンブルグ州の保養地のバードクロイツナッハで開かれた折、横手市の厚生連平鹿病院に在籍の頃出席した。演題は日本の農作業と食生活の実態についての事で次第に機械化で身体負担は軽減しているが食生活はまだこれからという実態であった。日本からは鹿児島大公衆衛生の白川教授が寄生虫について講演した。当時日本では耕耘機が普及し始めたがドイツではトラクターが動き目を見張った。

私はこの時知り合ったドイツのマックスプランク栄養研究所のW.Winths氏と文献交換などをしたが、2、3年して長野の佐久病院で同学会が開かれた時に来日したのを機に秋田に案内した。彼は日本の大豆製品に関心を持っており地域の農村や農家も廻ったが「もっと肉とチーズを」と話していた。また85年以降、行政の仕事に入ってから横浜市にある東京横浜ドイツ学園と町の小中学校が音楽を通じて交流し町にも訪れていた。またこれが縁でマンハイム市の音楽学校を紹介され町の教師2人と同市を訪問し市長と面会もしたがその場でワインで乾盃を受け、また同日のオペラ劇場にも招かれ恐縮した。

更に90年代に入って自治体国際化協会を通じてニーダーザクセン州ゴスラー市の広域自治体連合の職員を二年間町に迎え職員と机を並べて交流した。また95年過ぎ横手平鹿広域圏のごみ焼却施設や農業の視察があり私も参加した。有機農業もかなり普及し販売所を見学したりした。近くの農地に離し飼いの鶏もいた。またドイツのワイツェッカー大統領が来日し東京で講演会が開かれた折、上京して聴く機会を得たが、統一後のドイツの現実と未来についての格調高いものと受けとめられた。この時、前から通信の機会があった國弘正雄先生が世話役であったが、後で「地球憲法第9条」のご自身対訳の本の紹介を受け私も機会をみて普及に努めた。

私は地方自治の中で社会国家としてのドイツ、市民参加や民営化にも進んでいたドイツ、介護保険など学ぶ機会も多かった。8千万近くの人口のドイツだが市町村(ゲマインデ)は1万6千余で日本の五倍に近くあり、郡(ラントクライス)が国の事務の重要な部分を行うなど、地方分権は早くから定着しているとみられた。国際的にみて日本は今後もドイツに学ぶべき事が多いと思われる。

「3度目のドイツ」

能代市教育長

野中和郎



ビスマルクの肖像画の前で、愛用の椅子に座って
(ビスマルクミュージアムにて)



親日家ユッタ・オーベルグさんとの楽しい語らい.....

私にとって3度目のドイツは約2年前娘一家が住むハンブルグを訪れた時だった。それまでの2回はいずれも「出張」でありすべて研修スケジュールに縛られていたのに加えハノーバーより北に行っていなかっただけに北ドイツでの短い旅を存分に味わった。旧東ドイツの各地やアンネフランクの終焉の地ベルゲン・ベルビンの収容所跡、そして孫たちの通うハンブルグのインターナショナルスクールのスクール、フェア参観など予想を越える収穫の多い旅となった。中でも念願だったハンブルグ郊外フリードリッヒ・スルーにあるビスマルク博物館(Museum)を訪れることが出来たことは感慨一入だった。「ビスマルク」は私の卒論テーマ)それも当日休館のところ丁度学生たちの研究訪問があり午前中だけ開館しようとするところだった。まさにラッキー。加えてガイド役と通訳を引き受けてくれた娘一家と親交のある須藤女史(千葉出身)の懇願が叶い写真撮影も上品な感じの管理人の老婦人が笑顔でOKを出してくれ、これまたラッキー。ただ英語訳、日本語訳の資料集は売っておらず私にとって不如意のドイツ語版の資料より入手出来なかったことは残念だった。しかし何よりもビスマルク愛用の木製椅子でのスナップを撮ることが出来たことは最高の収穫だった。

●ユッタ・オーベルグ(Jutta Oberg)さんは元ハンブルグ桜の女王。日本にも親善大使として訪問しており日本人以上に日本に愛着をもっている親日家でもある。歯科医のご主人ともども娘一家は格別の親交をいただいていた。たまたま娘宅でユッタさんと“日本とドイツの実像と虚像、過去の戦争の受けとめ方、自虐史観や教育問題”等について2人でじっくり語り合う機会に恵まれた。とにかく面白い程話が弾んだことだけは事実だ。こんなにストレートに日本人の心を理解している外人はいないのではないかと.....との思いが募るひとときだった。

(教育問題について)

・不登校やいじめはドイツにもある。その背景は親に問題があり、加えて人種、宗教問題もからみ日本のような社会問題にもなれずその対応は不能の状態にある。今の緊急課題はそれに対応出来る教師の育成にある。

・ドイツの学校では1年生から落第制度があり当然その子どもたちはクラスでも学校でもひやかしの対象となるが、そのことに対する子供の心のフォローは問題になっていない。

・ヒトラー等へのタブー視は浸透している。しかし学校でくどくど強調する教師には逆に生徒側から強迫の手紙が届く。これは極右（スーパーライト）に対しても同じことだ。

（統一後の現状や青少年問題について）

・統一後、言論統制緩和などで急激に東側が悪くなった。犯罪も西地区の約20倍である。ネオチナに代表されるスーパーライトの存在も無視出来ない問題だ。

・ゴミのないきれいな国だと言われるが、いいところだけ目に入っているだけだと思う。

・ドイツにも結構悪^{ワル}も居るがたまたまハンブルグは最高の住み良いところだ。

・消費税16%は当然のことと受けとめている。それは値段の中に含まれているので何も感じない。

（日本の印象について）

・日本では終電に乗っても一度も不安や怖さを感じたことはなかった。この感じを外国人に与えている限り日本は最高の国であり続けるだろう。ただ今は円高でなかなか訪れることは困難だ.....。

以上がユッタさんとの語らいの主なものだった。（この語らいの日の朝、インターネットで自民党“加藤元幹事長の乱”のニュースを知った。）以上。

私のドイツ

秋田公立美術工芸短期大学

野村松信



高校時代柔道部に所属していた。夏の合宿が秋田市であり、ドイツからのスポーツ交流団との稽古。これがドイツとのお付き合いの始まりです。

学生時代、第二外国語に独語を選択。独語の先生は、日本語がまだあまり上手でないドイツ人女性。私は、語学は、得意でなかったが、その先生の魅力で、独語を一生懸命勉強した。結局は、あまり上達しなかったが、他学部の独語会話も積極的に履修し、課外活動等も通し、そのドイツ人女性と親睦を深めた。

初めての海外旅行先が、ドイツでした。大学3年の時、世界青少年交流協会が主催する青少年交流団の一員として、憧れのドイツに2週間滞在し、一層、ドイツが好きになった。ベルリンのホームステイ先のクーフェルドさんは、ご夫婦で日本を旅行した経験があり、日本びいきで、本当に親切にしてくださいました。当時は、壁で東西が分割され、その壁の向こう側（東ベルリン）に行くには面倒だったが、案内していただいた。食事は、日本食、そして日本人が好きな黒海苔まで準備していただき、その心使いが、大変に嬉しく、今でも良く覚えている。ドイツへの憧れだけは、ずっと持ち続けていたが、その後、企業に就職し、なかなか海外旅行等する機会は無かった。

秋田に戻り2年目の1997年9月末から半年間、在外研究員としてドイツでの生活。ドイツでのひとり生活は、当初、言葉の問題や環境の変化から、一時体調も崩し、悪戦苦闘もあったが、マンハイム、パッサウ、ミュンヘン等、各地で、大変に親切にしてください、楽しい思い出だけ。この滞在中に、ベルリンのクーフェルドさんと、18年ぶりに連絡がとれ再会。当時5歳位だった娘さんも、美しい優しい学生に成長していた。この時も、クーフェルドさんご夫婦には、以前にも増してお世話になってしまう。18年の間に、予想もできなかった東西ドイツ統一の喜びを語ってくれたのが、印象的でした。パッサウでは、特に、ツアーさんご家族にお世話になる。奥さんが日本人でしたので、何か困ったことがあれば、相談できたのが心の支えでした。ツアーさんのお子さん、青少年交流団の一員として秋田を訪問した皆さんが、日本人以上に義理人情味に厚い印象を受けた。

青年時代、お世話になったドイツ。今後は、様々な面で、私のできることで、少しづつでも恩返ししていきたい。そして、教育文化交流がますます深まることを祈念している。

「真夏の夜の夢」

萩原易雄

パッサウ旧市街の聖アンナ教会の壁は新品のキャンバスに様相を変え、その数年間の改修工事を終えて我々の来訪を待っていた。

秋田市の工芸を生業とする者達は、機会ある都度自分たちの切磋琢磨を重ねた技術を優れた作品、商品に表現し世に問う事をしてきた。これらの技術を外国の地でも目にしてもらえればとの思いが誰ともなく言葉にし実現の動きになって10年近くを経過した。そして、6月30日、7月1日と教会ギャラリーに展示会場を設営し、今朝はその開催を待った。

シュメラー市長、石川錬治郎市長の挨拶、H. E. ヴェルレンパッサウ芸術協会会長の歓迎の挨拶、武藤金悦市美術工芸協会会長答礼の挨拶の下、1994年7月2日午前11時に期間1ヶ月の秋田市美術工芸協会パッサウ展覧会は開催の口火が切られた。

教会中庭に設えられた祝賀会場には、これまでの開催を進めてきた難儀さを昇華させるほどに、乾燥した夏の陽が燦々と射していた。

帰国後、パッサウの関連者から工芸作品の伝統的技法と現代的意匠に感嘆の讃辞を頂戴した。秋田市からも謝意が伝えられた。これらは会員にとって実施までの年月の長さを、またパッサウの地までの距離の遠さを忘れさせる充足感をもたらす評価となった。

ポスターや作品目録の表紙の題材にもなった山崎泰子の染色と萩原源冶の木工の作品はパッサウ市に、また平野庫太郎の陶芸、斎藤国男の漆芸、進藤春雄の銀線、千貝弘の鍛金、武藤金悦の鍍金、湊征子の七宝の作品は(財)パッサウ芸術協会へ工芸展を記念し寄贈。

この事業に関連した一部の方々の氏名を感謝を併せ備忘したい。高田景次元市長、ヒュウズル元市長、Dr. プルンナー、ゾンベルガー展示責任者、F. シュレッター夫人、郁子ツアー通訳、増田佐智子通訳、高田理恵通訳、大門義廣市職員、当事業実施の裏方越後屋静雄事務局、故赤田義秋会員、故萩原源冶会員、牽引役武藤金悦会長は1998年4月物故。

心から感謝

林 真 生



凍ったハンブルク・アルスター湖

私は、いつもドイツの全ての人々に感謝しております。91年から2000年まで北ドイツに滞在したうちの7年間、ハンブルクとリュベックの音楽大学でピアノを学びました。

こんなに長い間、大学に行くことが出来たのは、ドイツの授業料が日本では考えられない程安かったからです（10年前で半年分の費用が5千円、現在で8千円位）。

これは、ドイツ人が払っている税金のかなりの額が大学に使われている為です。ドイツ人の中にも色んな人達いますが、自分がこの人々の税金によって勉強しているのだなあと、思うと自然に頭の上からぬ思いになっていました。

ドイツに学ぶどの国の留学生も皆、何でも分け隔てなくドイツ人と同等の扱いをされている事にも驚かされます。勿論、試験の時も外国人だからといって、全く容赦はないのですが.....。

後進を育てていこうとするドイツの姿勢には、私達の国が学ぶべき所が沢山あると思います。

私が感謝している事にもう一つ、ドイツの奨学制度があります。これも殆どの奨学団体が外国人にも門を開いています。

日本では、ある特定の学生がかなり裕福な家庭なのにもかかわらず奨学生となるケースがとても多いようです。でもドイツでは、本当に実力があり、経済的支援なしには勉強を続けるのが困難な学生に、公平に支給されています。

ハンブルク音大で知り合った私の主人（チェリスト）もその恩恵を被っており、同市のロータリー財団より7年間に渡り奨学金を頂きました。

彼は親の援助を受けず、全くの自費で留学を始めたので、当初はドイツにいられるとしても3ヶ月！という究極の状態でしたが、ギリギリの所でこの財団に助けられたのです。

もしも彼に奨学金がなかったら、果たして今の私たちはあったでしょうか。結婚後も支援して下さいたこの財団に、私たちは言葉には言い尽くせないほど感謝しています。

心の故郷のドイツ、これからも一生この感謝の気持ちを忘れずに、聴いて下さるお客様に夢を与えられる音楽家になれるよう頑張ります。

姉妹提携使節団 “今日は 秋田です”

秋田女声合唱団

団長 船 木 孝 子



公会堂前広場でドイツテレビ録画どり。プレヒタ市長、通訳シュラーよう子さんと。



公会堂を案内されるプレヒタ市長と一行。



四季の歌

和服姿で「さくら さくら」……で入場。



映画音楽集

「ウエストサイド物語」より トウナイト

山王大通りの市役所前を行く度ごとに、花時計の奥のPASSAU市から贈呈された鐘に心引かれる。私達が「秋田市、PASSAU市友好文化交流使節団」として渡欧したのは、1983年（S.58年）当時の市長高田景次氏はドイツとの国際交流事業を計られ、芸術、文化と共に風光明媚なPASSAU市に着眼されたと同っているが、“正に宜なること”と後日納得することになる。数年来交流に訪れてはいてもなかなか、姉妹提携に結びつかない。今度は秋田市民による合唱団の訪問で熱意を示そう、との市側の意図を企画調整課から聞き、身の引き締まる重責感を抱きながら、準備に取り組んだ日々を懐かしく思われる。

前年の秋に依頼され、指揮者は三浦修二先生とし、秋田女声合唱団を核とし、市民から数人の応援も得て25名の合唱団員で練習に漕ぎ着いたのは2月に入っていた。音楽の本拠地ドイツでの演奏とあって選曲には三浦先生と悩んだ。そしてドイツ在住の先生の教え子、塩谷方沙子さん、三浦和子さんなど、ソリストも加えてのプログラムを組んだ。企画調整課畠山茂氏の手順良い交渉で、PASSAU側の

了解も得て、ヨーロッパ音楽祭週間の一日を「秋田の夕べ」とし特設する、との一報が入り練習に演出にと盛り上った。その熱の入った所で5月26日、“日本海中部地震”が襲ってきた。私の自宅兼商店の奥には年代物の家業、醤油味噌醸造の土蔵がひしめいていた。それが総くずれである。自宅は移転する事となり留守は許される状態でない。でも使命ある事業だからと家族の理解も有り、参加することとなり心から感謝した。引っ越し作業をしながらで、渡欧一週間前の使節団結団式後、荷物発送日になっても、私のトランクはまだ空っぽだった。

何はともあれ、6月30日成田空港からアンカレッツ経由でフランクフルト着、リュースハイムから定版の観光コースのライン下り、右も左も絵のような風景に見惚れドイツ人気質にふれ、ミュンヘンから列車でパッサウ駅に到着。ホームにはドクター、ツアール氏、エダー氏等、諸氏の出迎えに恐縮、と急にプラスバンドの音に吃驚、お礼に駅で又「さくら さくら」の合唱となった。レストランでの食事後、公園散策中にと何かと歌う羽目になる。ドイツ人の音楽好きは私達の発声にも良い事である。そうこうしてる間にカレンダーは7月3日、午後3時50分頃2館のホテルに分かれてひと休み。畠山氏始め事務方と私は休む暇なく明日に控えた本番の打ち合せ。体調の秀れない三浦先生は二日程前から発熱され、指揮出来るか不安で落着かない。打ち合わせを済ませてホテルに行くと、先生が演奏会場の音響を確かめるため下見をする、との事、この時は“さすが！”と頭が下った。

ホテルから石畳の道の感触を味わい7分程で公会堂だった。恰幅のいい当時のプリヒタ市長が出迎え案内役をして下さった。聞きしに勝る芸術絵画の殿堂だ。音響も抜群、先生も合唱団員も明日はこのドームで演奏するのだと頬が紅潮した。

4日、本番の日は9時からドームでリハーサルだ。とにかく2泊3日の滞在で時間が惜しまれ体力の限界を越えるスケジュールだ。でも使命ある演奏会は成功裡でないと意味はない。気合いの入ったリハとなった。昼食もそこそこに聖シュテファン教会の礼拝時間に合わせて駆けつけ、初めての、それに世界最大級のパイプオルガンの荘厳な響と華麗な造形装飾に圧倒され、その上“アヴェマリア”など、歌うチャンスまで取りつけたりして、今だにすごい事をしたと思う。でも私は皆んなの夜の本番までの体調と声質を心配した。

3時から、市長表敬訪問。身仕度を整えて早めにホテル出発。市長は公式行事時着用の勲章を着けた礼装姿、ドイツ人の歴史と威厳に私達の軽装を恥じた。私は一応きものだったがゆかたで後悔しきりだったが、市長は珍らしそうに話しかけられ、見詰める瞳の優しさに上ずって、話した内容は記憶にない。古村団長、代表者等で高田市長からのメッセージ、各市旗の交換、記念メダル授受となり感激のひと時であり又、いよいよの始まりに緊張感を覚えた。

6時半頃からドームは一杯のパッサウ市民で埋まり前列は市の各界名士の指定席、プログラムもドイツ語と日本語版が配られ、間もなくソプラノ歌手としてドイツで活躍中の“堀和子(三浦)さん”のアリアの歌声が控室で待機の私達の部屋まで流れてきた。

7時合唱団スタンバイ。組まれたステージのバックは眩く輝くスタンドグラス、拍手の中夢の世界を歩くように並び、やがて三浦先生の指揮の魔法の手が上った。(私達は曲想を促すような指揮時の先生の指を魔法の手、と云って感受していた)

四季の歌 春、「さくら さくら」他3曲

日本古謡と民謡 3曲

この中での「会津磐梯山」.....振り付き特に好評。豆しばり手拭、竿灯のうちに鈴、パーカッション、タンバリンでリズム

日本歌曲 独唱 塩谷万沙子、「城が島の雨」他2曲

映画音楽集「トゥナイト」他2曲

世界の名曲「グノーアヴェマリア」塩谷さんソロ入り

モーツァルト「アレルヤ」塩谷さんソロ入り

ベートーヴェン「天使の合唱」

「あー！終わった。」

アンコールの拍手が鳴りやまない、でも三浦先生は大丈夫か？その方が気になる。先生頑張っ！アンコールやろう、心の中で叫んだ。スリムな先生が又、細く感じられた。誰かがそっと椅子を横に置いてくれた。先生の顔にも感動と微笑みを見た。片手を椅子に凭^{もた}れて片手が上がった。ア、ウンの呼吸で奥田由美子さんのピアノ前奏が始まり「ブラームスの子守歌」“p”で静かに流れドームに飴した。二度目のアンコールでは予定してなかった未完の「ショパンの夜想曲」まで歌ってしまった。

“音楽に国境は無い”を肌で感じ、アマチュアでも心を込めて、曲想を理解し感情表現を大切に歌うと理解を得、感動を共有出来る。この喜びは音楽の偉大さだ。終幕で退場の時、団員皆涙で一杯であったが、私は感動し胸は一杯であるが涙は出てこない。控室手前で三浦先生に「ありがとうございました」と云った途端、どっと溢れ出た。

10時過ぎ、両市民の親善交歓会も賑やかに終了し帰路の夜空には星が瞬き、ライトアップされた古城の夜景が疲れを癒してくれた。

後日三浦先生がまとめて下さった旅行記「パッサウの空に秋田の歌声が」の中に先生の実感こもる一節がある。

「思えばよくやりとげたなあ、本当にうれしい。

夜のとばりが深まるにつれ、じわじわと感激がわいてくる

疲れた！でも心地良い疲れただ……」

そして10月21日、パッサウ市議会は秋田市との姉妹都市締結を決議された。この知らせの電話を畠山茂氏から受けた時、大きな安堵感に手が震えた。

20年を隔た今も、このチャンスを与えて頂いた諸師諸兄に感謝の念で一杯である。

ありがとうございました。

2003年1月8日

私とドイツ

松岡内科クリニック

松 岡 一 志



1994年9月、世界心臓病学会終了後、私が滞在したパート・ナウハイムのマックス・ブランク研究所の前でシャーパー教授夫妻らとともに記念撮影。

後列左から、私、シャーパー夫人、ガシックさん（秘書）、妻、シャーパー教授、前列右から二女、長女、長男。

ハンガリー、ユーゴスラビアに10日余り旅行した折りに秋田市の姉妹都市のパッサウにも一泊しました。イタリア風の壮大なドームが印象的でした。

ドイツに滞在した当時、同僚にベルリンとミュンヘンには是非行ってみるべきだと言われましたが、諸事情のためついに訪れることなく帰国し、非常に心残りでした。

1994年9月、ベルリンで世界心臓病学会が開かれ、この学会長がシャーパー教授であったため私も一大決心をして家族総勢でベルリンに出かけました。当時、ベルリンのホテル部屋数は少なく、ホテルの予約に失敗して学会事務局からベルリンのツーリストインフォメーションを紹介され、民宿を予約して出かけました。着いたのはポツダム広場近傍の地下鉄駅でした。ポツダム広場は大戦前はベルリンの中心地で、信号機第1号が設置された場所とも言われています。現在は、ベルリンの中心地として復活を果たしたようですが、当時は何もありませんでした。夕方に着いたのですが、地下鉄駅の壁は落書きだらけで人通りも少なく、うら寂しい感じさえしました。

民宿はアパートの一室で、12畳ほどの部屋にベッドを4台入れてもらい、ここに家族5人が寝泊まりしました。家族全員で一泊朝食付きで5,500円程度でしたから格安でした。

ベルリン市内はそれほど広くはありませんので徒歩で町中を探訪し、一日平均2万歩ほど歩きました。ブランデンブルク門、チャーリーポイント、旧東ベルリン市街など感慨深いものがありました。

ベルリンからフランクフルトに戻って、車を借り、南下してロマンティック街道を通りノイシュパンシュタイン城などバイエルン地方を周りミュンヘンに到達しました。運良くオクトーバーフェストの初日にあたり、大テントの下でジョッキを傾けることができました。

現在、開業してから間もないためまだ海外旅行に行けるほどの余裕はありませんが、またいつの日にかドイツを訪れたいと思っている今日この頃です。

秋田市 魁新聞 4月8日、姉妹都市調印

4月8日、秋田市とドイツのパスau市との姉妹都市調印式が、秋田市会館で挙

行された。秋田市長の佐藤一雄とパスau市長のグレンツハインは、調印式で調印書を交換し、両市の友好関係を更に発展させることを誓った。

調印式には、秋田市長の佐藤一雄、副市長の佐藤一雄、パスau市長のグレンツハイン、副市長のグレンツハイン、両市の議員ら約40人が参加した。

調印式は、秋田市長の佐藤一雄が、パスau市長のグレンツハインに調印書を渡す様子から始まった。両市長は、調印式で調印書を交換し、両市の友好関係を更に発展させることを誓った。

調印式には、秋田市長の佐藤一雄、副市長の佐藤一雄、パスau市長のグレンツハイン、副市長のグレンツハイン、両市の議員ら約40人が参加した。

調印式は、秋田市長の佐藤一雄が、パスau市長のグレンツハインに調印書を渡す様子から始まった。両市長は、調印式で調印書を交換し、両市の友好関係を更に発展させることを誓った。

調印式には、秋田市長の佐藤一雄、副市長の佐藤一雄、パスau市長のグレンツハイン、副市長のグレンツハイン、両市の議員ら約40人が参加した。

市長らが西独へ
市民の参加者も募集

秋田市長の佐藤一雄と副市長の佐藤一雄は、4月8日、ドイツのパスau市を訪れ、姉妹都市調印式を行った。両市長は、調印式で調印書を交換し、両市の友好関係を更に発展させることを誓った。

調印式には、秋田市長の佐藤一雄、副市長の佐藤一雄、パスau市長のグレンツハイン、副市長のグレンツハイン、両市の議員ら約40人が参加した。

調印式は、秋田市長の佐藤一雄が、パスau市長のグレンツハインに調印書を渡す様子から始まった。両市長は、調印式で調印書を交換し、両市の友好関係を更に発展させることを誓った。

調印式には、秋田市長の佐藤一雄、副市長の佐藤一雄、パスau市長のグレンツハイン、副市長のグレンツハイン、両市の議員ら約40人が参加した。

調印式は、秋田市長の佐藤一雄が、パスau市長のグレンツハインに調印書を渡す様子から始まった。両市長は、調印式で調印書を交換し、両市の友好関係を更に発展させることを誓った。

調印式には、秋田市長の佐藤一雄、副市長の佐藤一雄、パスau市長のグレンツハイン、副市長のグレンツハイン、両市の議員ら約40人が参加した。



この写真は、秋田市長の佐藤一雄と副市長の佐藤一雄が、ドイツのパスau市を訪れ、姉妹都市調印式を行った様子から始まった。両市長は、調印式で調印書を交換し、両市の友好関係を更に発展させることを誓った。

会員 伊東富美子さん提供

秋田日独協会創立30周年記念誌

発行：秋田日独協会

発行日：2003年 5月

事務局：秋田市大町6丁目3-47

印刷：太陽印刷株式会社

